

第 17 回目 (1994 年 2 月 21 日放送)

【いろはがるた】

「文はやりたし書く手は持たぬ」: Even if I want to express myself to my sweetheart, I can't because I'm too illiterate.

【話の内容】

1928 年、大久保がホノルルからコナに行った頃には、コナの日系人社会には 3 人のリーダーがいた。1 人目は北コナで「コナ反響」を始めたダクタ・ハヤシ(林三郎医師)である。福島出身でアメリカの医科大学を出た。息子の林三成は早稲田を卒業し実業家に。その弟は林千里といい、医者であった。2 人目は中コナのケアラケクアの丸本玉次郎で、丸本商店とコナ劇場を経営していた。息子は、丸本正次判事である。3 人目はキャプテン・クックにいた森田丑馬は高知県出身でハワイコーヒーミルクカンパニーの支配人。前職は日本語教師であった。息子はホノルルシティバンク会長のジミー・森田・ミノルである。

ジャパニーズカルチャーセンター(ハワイ日本文化センター/ Japanese Cultural Center of Hawaii¹)が近々完成する。ハワイ報知の 1 月 25 日の紙面で佐藤慶治基金募集委員長とアルバート・宮里のインタビューが報じられていた。宮里が「ギャラリーが文化センターの心臓です。それがないとただの集会所になってしまう」と言っており、感動した。5 月 20 日から 22 日まで開館記念行事があるが、みんながいろんな所から協力し合って後世に残るような文化センターになるといいと思う。基金の募集はあと 20 万ドルとなっている。

昔からのもので、後世に残したいものがある。ホレホレ節はよく知られているが、カチケン¹節もあり、教えられることが多くある。

「今朝は明き月よ 研鎌の光 負うてカチケンの 野に出でる」

「可愛い里子をよ 預かる心 撫でて育てた 2 年越し」

「汗を流してよ 作った報い 今日のかちけん おめでたや」

「心づくしてよ 作っただけに カチケンするにも 気がいさむ」

「無事にかちけんよ 済ましてうれし 苦労甲斐ある キビの出来」

「カチケン済ましてよ かしどきあげて ボーナスもらって 帰国する」

こういった移民たちの苦労や思いを、次の世代に伝えていくためにも、カルチャーセンターのギャラリーは大切な存在となるだろう。

【曲】

¹ Cutting cane のこと。サトウキビを切る作業。

「山の呼ぶ声、母の声」

【サブジェクトタグ】

ハワイ日本文化センター コミュニティ 有力者 プランテーションの暮らし かけ
んの歌